

上昇を表す複合動詞の日中対照研究 — 「～上げる」と「～上(shang)」を対象として—

王 秀 英

キーワード：「～上げる」、「～上」、基本義、拡張義、文法化

要旨

日本語と中国語において、上昇を表す複合動詞はそれぞれ「～上げる」と“～上”が挙げられる。両者は方向性を表す時、同じ意味を持っている。本論は「上昇」という同じ基本義を持っている日本語複合動詞「～上げる」と中国語複合動詞“～上”を対照しながら、文法化の視点から両者の基本義から拡張義への発展プロセスと意味派生上の異同点を明らかにすることを目的とする。分析の結果として、両者とも基本義の「上への空間的移動」から拡張義が生じることが明らかになった。拡張義においては、両者ともアスペクトの働きをする機能を持っている。また、アスペクトの意味を表す時、両者とも動作の完成を表す意味を持っている。相違点として、アスペクトの意味を表す時、日本語複合動詞「～上げる」は動作の完成のみを表し、中国語複合動詞“～上”は完成と開始を表すことが指摘できる。また、「～上げる」の全ての意味は空間に深く関わっているが、“～上”の意味は空間と動作の内的時間に関わっていることが明らかになった。

1. はじめに

現代中国語において、動詞に方向性概念を付与する場合、動詞の後ろに方向性を示す趨向動詞（例えば上への移動を表す動詞“上”と下への移動を表す“下”などが挙げられる）を後接するが、それは日本語の「運び上げる」、「舞

い落ちる」などの複合動詞に相当する（混乱を避けるため、本論では日本語複合動詞を「」で示し、中国語複合動詞を“”で示す）。この方向性を表す後項動詞は「方向補語」と呼ばれ、『現代中国語文法総覧』（1996）によると、中国語の方向補語は単純方向補語の“上・下・来・去・进・出・回・过・到・起・开”と、“来・去”が他の単純方向補語と結びついた複合方向補語に分けられる¹。中国語の「動詞＋方向補語」は日本語の複合動詞に相当するので、本論ではこれを中国語の複合動詞として扱う。

先行研究の中で、上昇を表す日本語複合動詞を考察対象として分析を行ったものとしては主に姫野（1999）、日中の複合動詞を対照させたものとしては待場（1992、1993）、左（2008）、陳・王（2011）がそれぞれ指摘できる。また、中国語の「V＋方向補語」を考察対象として分析を行った先行研究としては主に黄（2002）などが挙げられる。それぞれ方向性を表す日本語の複合動詞と中国語の複合動詞を考察し、両形式の意味特徴などを分析しているが、同じ複合動詞の持っている異なった意味間の関連性、両言語の相違点が生じる原因についてはまだ解明されていない。

本論では、上昇を表す日本語の複合動詞「V＋上げる」（以下「～上げる」と略す）と中国語の複合動詞「V＋上」（以下“～上”と略す）を取り上げて、それぞれの意味による特徴を明らかにし、両者の意味拡張における異同点を考察した。

2. 先行研究及び問題点

待場（1992、1993）は中国語の形容詞または動詞の後ろにくる方向補語で、空間的移動の方向性を表すではなく、派生義を表す場合について、「(1) 動詞または形容詞と方向補語の組み合わせが限定的であるかどうか、(2) 限定的なものについて、動詞または形容詞に共通の類型が認められるかどうか、(3) 語義的に見て、日本語との対応関係が成り立つかどうか、(4) 日本語と対応関係が成り立つ時の訳語が適当かどうか」という4点から考察している。

姫野（1999）は日本語の複合動詞「～あがる」と「～あげる」を後項動詞の意味的役割によって分類し、それぞれの用法について考察した。また、語構成の面から「自立V＋自立Vのグループ」（「V」は「動詞」を表す、以下同様）と「自立V＋付属Vのグループ」の2つのグループに分け、主に「自立V＋自立Vのグループ」に対して詳しく分析し、この2つの複合動詞の構文形式、

格助詞、前項動詞の自他性、後項の担う意味をそれぞれ考察した。結果をもとに、「～あげる」をその意味によって次のように分類した。①上昇、②上位者が下位者へ或いは下位者が上位者への社会的行為、③体内の上昇、④完了・完成、⑤強調、⑥その他の6分類である。

黄（2002）は「低位置から高位置へ移動する」意味を表す“V + 上 + L”（文中に共起する場所目的語を「L」とする。例えば、“他跳上椅子”「彼は椅子に飛び上がった」）構文において、“上”が表す意味と統語的機能を、Lに付加される方位詞の観点と別の方向性動詞が構成する“V1 + V2 + L”（例えば、“他刚才跑出教室”「彼は先ほど教室を走り出た」）構文との比較によって、明らかにすることを試みている。結論として、“上”と共起する名詞的成分「L」を「着点」とするには不整合性があるということ、“V + 上 + L”構文は、移動の「地点」に焦点が置かれるのではない、即ち「着点」指向ではなく、“上”と共起する名詞的成分は、上向きの移動動作が作用するモノ（「地点」）を対象化し取り立てる機能を有しているということ、を指摘した。

左（2008）は「上」と「下」のイメージ・スキーマの日本語と中国語におけるパターンを提示することによって、それぞれの種類の比較を行い、それぞれのイメージ・スキーマの認知プロセスにおける捉え方について考察した。その結果、「トラジェクター、経路、ランドマークの3つの要素とその間の相互関係は認知的な構成になっている。「上」と「下」の表現を考える場合、場所・空間の認知のドメインを背景としてプロファイルされるトラジェクターとランドマークの関係から分析すれば、人間の認知構造が明らかになるとされる」とを指摘している。

陳・王（2011）は日野資成によって定められた文法化の基準（意味の稀薄化）に従い、日本語の複合動詞「V - 上げる」と中国語の“V - 上”に関し文法的・表現的機能から両者における文法化の相違点について考察した。陳・王（2011）では、日本語の複合動詞「V - あげる」を①文法的機能（「終了」というアспект）と②表現的機能（強意の意味添加、謙譲の意味添加、プラスイメージ添加）に分類した。また、中国語の“V - 上”を文法的機能（「終了」というアспект表現、「開始」というアспект添加）と表現的機能（プラスイメージの意味添加）に分けた。

以上、上昇を表す日本語の複合動詞と中国語の複合動詞についての先行研究を概観した。それらの先行研究の記述を踏まえると、同じ形式の複合動詞の持

つ異なった意味間の関連性、上昇を表す日中両言語の複合動詞の意味派生のプロセス、意味派生上の共通点と相違点について、先行研究ではまだ十分に解明されていないと言える。

3. 研究対象及び研究方法

上昇を意味する複合動詞は日本語には主に「～上がる」、「～上げる」、「～のぼる」がある。中国語には2種類あり、単純方向補語の“～上”、“～起”と複合方向補語の“～上来”、“～起来”を指摘できる。先に述べたように、日本語複合動詞「～のぼる」は上昇を表すが、造語力が弱く、用法も限られているため、本稿では扱わないこととする。また、「～上がる」の用法は多岐にわたっているが、紙幅の制限のため、これも本稿の研究対象の範囲に入れず、他の機会に譲りたい。また、中国語複合動詞“～起”の後ろには普通“来”「てくる・ていく」という視点が入ってくるので、本論はこれを扱わないことにして、日本語複合動詞「～上げる」とそれに対応する中国語“～上”を取り上げて分析した。

本論で扱った日本語複合動詞の例文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下「BCCWJ」と略す）、『中日対訳コーパス』（第1版、北京大学日本学研究所センター、以下「中日対訳」と略す）から検索したもので、中国語の例文は『北京大学中国語言語学研究所センターコーパス』（以下「CCL」と略す）、『中日対訳コーパス』と『現代中国語文法総覧』から収集したものである。

4. 文法化における位置づけ

宮下（2004）によると、文法化（grammaticalization）とは、文法が生じてくるプロセスを指す用語である。宮下（2004:21）は次のように述べている。

例えば日本語の格助詞や、「見た」の「た」や「食べている」の「ている」のような時制・アスペクトの標識は、文法機能を担う言語形式だと言える。このような形態論的な文法の捉え方に立つと、文法化とは開いたクラスに属する形式が、格助詞や時制・アスペクト標識のような閉じたクラスに属する形式へ、さらには閉じたクラスに属する形式が、別のさらに閉じたクラスの形式へと変化する過程と捉えることができる。文法化研究では、文法化の流れが大局的に見てレキシコンから文法へと進んでゆくと把握されることも多い。その際、両者の境

界は連続的なものと見なされる。

文法化研究には言語の歴史的なものを扱う通時的研究と静態的に扱う共時的研究があるが、本論では日中両言語の複合動詞を共時的視点から扱い、通時的に扱おうとするものではないことを予め断っておく。

5. 日本語複合動詞「～上げる」の分類、意味的特徴及び文法化のプロセス

5.1 日本語複合動詞「～上げる」の意味と特徴

本論では姫野（1999）の分類を基に、日本語複合動詞「～上げる」の意味と特徴をまとめて以下のように5種類に分ける。

①上への空間的移動を示す。ex. 抱き上げる、持ち上げる、拾い上げる、吸い上げる、押し上げる、投げ上げる

(1) トラ吉は、子犬を抱き上げるとアパートに入っていった。(BCCWJ 那須正幹 (著) 『どろぼうトラ吉とどろぼう犬クロ』)

(2) ポンプで水を吸い上げて、それをかけて火を消します。(BCCWJ 『自動車・飛行機』)

(3) 海岸まで流された冷蔵庫も運び上げ、がれきを手作業で取り除いた。(BCCWJ 『西日本新聞』)

このタイプの複合動詞の後項は動作主が上へある動作を行うことを表し、前項動詞は主体自身或いは客体の空間的移動を発生させる動詞である。動作主の動作によって主体或いは客体が位置の低いところから高いところへ移動する²ことを表し、空間的移動と呼ばれる。これは両言語の複合動詞の基本義と言えよう。

②上への抽象的移動を表す。ex. 繰り上げる、競り上げる、切り上げる

(4) 二千四年度改定で、基礎的財政収支が黒字化する目標年度を二千十二年度に、一年繰り上げました。(BCCWJ 『国会会議録』)

(5) 彼は、私が患者を見舞う時間を早く切り上げさせようとはしなかった。(BCCWJ ディック・フランシス (著) 菊池光訳 『告解』)

(6) 担当者が、事故後、六百万円を支払うはずだったにもかかわらず、二百五十万円から交渉して小刻みに競り上げたことにたいする彼の怒りだった。(BCCWJ 鎌田慧 (著) 『この国の奥深く』)

このタイプは対象物が時間や数字などを表すもので、空間的移動ではなく、

抽象的な数字や序列などの上昇を示していると考えられる。これは数字や序列の低い方より高い方が上の位置に置かれているためと想像できる。(4) と (5) は時間を表すものであり、(6) は金額の量を表し、両者とも同じように数字で示されているものであると考えられる。このタイプは空間を表すものから時間或は抽象的なものへの拡張である。

③社会的行為の上下関係を示す。ex. 借り上げる、買い上げる、召し上げる、差し上げる、存じ上げる、申し上げる

(7) 紀ノ国屋は、買い上げる品物が多ければもちろん配達してくれる。

(BCCWJ 江藤淳 (著) 『妻と私』)

(8) 中村雅敏の息子をどう思いますか？

ごめんなさい、存じ上げません。(BCCWJ 『Yahoo! 知恵袋』)

(9) 所得の半分は国に召し上げられる。(BCCWJ 大前研一 (著) 『新・国富論』)

このタイプにおいて、前項動詞は思考、言語活動を表す動詞或いは活動動詞であることが観察される。主体と客体の間に地位的な差異が存在する、国、官庁、大手会社と国民、個人、小さい会社の間の社会行為を表す。尊敬或いは謙譲として使われる場合もあり、日本語の敬語において広く使われる。地位が自分より高い相手に対して、ある動作を行う時、その動作も相手を高いところに置くように使う。この場合、主体にとって、相手を自分より地位の高い方とみなしている心理的イメージを表す。「空間的移動」と同じように下から上への移動を表し、空間的移動から心理的移動への拡張であると考えられる。

④程度の強さを強調する。ex. 鍛え上げる、締め上げる、調べ上げる、絞り上げる

(10) ところが度々雑誌記者におだて上げられる中に、この成功者は自分を若いものの師表と思いつまむようになった。(BCCWJ 佐々木邦 (著) 『ガラマサどん』)

(11) 相手組織の幹部を尾行して、待機場所から本人の自宅、女の住所、勤め先…と、みんな調べ上げてますよ。(BCCWJ 向谷匡史 (著) 『ヤクザという生き方』)

(12) 毎夜クラブで即興的にパフォーマンスを繰り広げ、観客の反応を確かめながら、作品を練り上げていく。(BCCWJ 三重亀太郎 (著) 『weekly びあ』)

このタイプの複合動詞は前項動詞に強意の意味を添え、「十分に～する」、「強く～する」、「すっかり～する」などに言い換えられる。意味①は単純に位置的上昇を表すが、意味④は動作の程度や状態を高くすることを意味する。これは「空間」から「質」への拡張と考えられる。複合動詞「～上げる」の場合、強意の意味を添加した後の意味は単独の前項動詞の意味と比べると、高い「程度」を表している。或いは、状態が高くなるということの意味している。元の状態に比べて、強意の意味を添加した後の方がもっと高い「位置」に置かれていると考えられる。このタイプの複合動詞は後項動詞が前項動詞を修飾する働きをしている。

⑤完成・完了を表す。ex. 炊き上げる、築き上げる、作り上げる、焼き上げる、刷り上げる

(13) 一体どうやったらこんな複雑な糸を絡ませること無く、一本に編み上げることが出来るのか……。 (BCCWJ 『Yahoo! ブログ』)

(14) 歳月に洗われ、織り上げられた事件の糸目だけが残っていく。 (BCCWJ 松谷みよ子 (著) 『松谷みよ子の本』)

(15) 國男氏は今日の武田薬品を築き上げた五代目の祖父と六代目の父のもとで育った。 (BCCWJ 小林隆次・武田国男 (著) 『落ちこぼれタケダを変える』)

このタイプの複合動詞の後項は終了を表す「終える」或いは「終わる」に言い換えることができる。また、前項動詞にアスペクト（動作の終了）の働きを加えている。主体はある目的を達成するために、絶えず努力してきて、やっとなある動作・行為を完成させる、というプロセスを有している。動作全体のプロセスから見ると、段階的に上へ発展するようなイメージを与えており、上への方向性が観察される。それと同時に、動作・行為の進行に伴って、完成した量も次第に多くなっており、全体から見れば、累積した結果として見ることも可能である。まだ完成していない動作に比べて、完成した動作の質が高いというニュアンスもあるため、意味①から生じた派生義と考えられる。動作が時間軸において「動作の完了」という点まで到達していることを表している。

以上の5分類で日本語複合動詞「～上げる」の意味・用法のすべてが明確に分けられるわけではなく、各分類の間に曖昧なところも存在している。その他、文脈によって同じ複合動詞の有する意味も変化してしまう場合もある（例えば、「読み上げる」は場合によっては「大きな声で読む」とも「最後まで読

む」とも読み取れる)。また、前項動詞が後項動詞と一体化していて、分離できない例（例えば、「でっち上げる」）もある。この点については、おそらく歴史的な問題もあると考えられる。本論では、それらの文脈による意味と歴史的な問題を扱わないこととして、研究対象から除外した。

5.2 日本語複合動詞「～上げる」の文法化のプロセス

上で見たように、日本語複合動詞「～上げる」の持っている意味はお互いに独立したものではなく、関連しているものであることがわかった。つまり、同じ形式を持っている複合動詞の各意味間には連続性が見られるということである。各拡張義は基本義「空間的上昇」から派生したことが観察されるが、これは後項動詞の文法化であると言える。

上で述べたように、複合動詞「～上げる」は次の5種類の意味を持っている：①上への空間的移動を示す、②上への抽象的移動を表す、③社会的行為の上下関係を示す、④程度の強さを強調する、⑤完成・完了。

「上への空間的移動」は基本的意味で、具体的に対象物が実際にあるところ（A）から他のところ（B）へ移動することを表す。図で示すと以下の図1のようになる。（白丸は対象物、実線矢印は移動そのものを表す）



図1 「上への空間的移動」を表す意味

これに基づいて考えると、意味②は視線、数字、時間や序列などの移動を表し、移動先が空間的場所ではなく、目に見えない抽象的場所であり、対象物も具体的なものではなく、視線や時間、金額を示す数字などの抽象的なものである。この場合、「上への空間的移動」を表す意味と同じような経路を持っているので、全体的に上への移動として理解できると思われる。時間の前後順序を表す場合では、ある時点を基準にして、この基準点の前の段階に位置する時間帯は「上」として捉えられる。視線の移動を表す場合は「見上げる」が例として挙げられる。前項動詞「見る」は移動動詞ではなく、動作主自身は移動せず、ただ視線が上へ移動することを表すので、前者と違ったところがある。これは複合動詞「～上げる」の意味拡張の最初の段階であると思われる。

日野（2001）では、文法化は3つのタイプに分けられている：抽象化（意味は具体から抽象へと変化し、具体的な意味がなくなる代わりに抽象的な意味が現れる。つまり、意味の喪失は伴わない）、抽出化（もともとの意味の一部が失われる）、意味の希薄化（もともとの意味が失われる。つまり、意味の喪失である）。

日野（2001）の説明を適用すれば、この用法は意味の抽出化であると見なすことができる。つまり、もともとの「対象物全体の上への空間的移動」から「動作主の一部が動作を実施する時に伴った上への方向性」への派生過程である。

これらは「具体的な空間」から「抽象的な空間」への派生であると考えられる。もともとの「空間的移動」の意味が残っているため、移動先が「抽象的な空間」になると、複合動詞全体の意味も抽象化してしまう。

意味③の「社会的上下関係を示す」ということは、話者が自分より身分の高い相手にとって、敬意或いは尊敬を表す時に使う。この場合、動詞「上げる」のもともとの「空間的移動」の意味はさらに薄れて、「移動」ではなく、相手を高い位置に置くように対応する「心理的上昇」として捉えられる。この用法は話者の主観性に関わると考えられる。「敬意」の抽出化の段階に属する。この場合、複合動詞「～上げる」の後項はもともとの動詞から離れて、敬語としての働きが見出される。

意味④の「前項動詞の表す動作の程度を強調する」ものにおいては、後項動詞は動詞の働きを失って、だんだん修飾的な働きが現れるようになる。このグループにおいては、前項動詞の表す動作と対象によって、後項動詞「上げる」の表す意味も違ってくる。次の例を見てみよう。

- (16) 後手に縛り上げられた手首が感覚をなくしている。(BCCWJ 野田昌宏 (著)『銀河乞食軍団』)
- (17) 刀は重いのでみんな研ぎ上げて細身になっている。(BCCWJ 峰隆一郎 (著)『土方歳三』)
- (18) 参加者たちは、訪れる人の喜ぶ顔を想像しながら心を込めて丁寧に塗り上げている。(BCCWJ『市報かみのやま』)
- (19) バブルの時期に過剰な融資を行って不良債権を積み上げたのは銀行ではなかったのか。(BCCWJ 吉川元忠 (著)『円がドルに呑み込まれる日』)
- (20) もちろん、博奕を打つというわけでもないし、女に入れ上げることも

ない。(BCCWJ 峰隆一郎 (著)『奥州の牙』)

上の例を見ると、(16) の場合は、前項動詞に強意の意味を添加しているのみで、動作の実施によって完成物が生まれることはない。(17) と (18) はいずれも対象物の質に関わるもので、前項動詞の表す動作の実施によって完成物の質の高いレベルに達することを表している。(19) と (20) はいずれも対象物の量に関わるもの (例文 (20) における対象物は「お金」を指す) で、前項動詞の表す動作と対象物の性質によって、複合動詞「～上げる」の後項動詞が対象物の質を表したり、量を表したりする。動作の程度性の強調は具体的に対象物の量や質によって表現する。「程度の強さを強調する」という意味は意味①「上への空間的移動」を表すものから派生したと考えられる。

意味⑤の「動作の完成・完了」を示すアスペクトの働きは、「上への空間的移動」から「動作の時間軸における完成段階への移動」へ、という発展プロセスとして理解できると思われる。なぜならば、アスペクトは動作が時間軸上で示す段階として捉えられるからである。「空間」から「時間」への派生は日本語だけではなく、多くの言語においても見られる現象である。動作の完成は時間軸上で終了点に置かれ、完成した動作は未完成の動作に比べて、より高い位置にあるものとして捉えられやすいために、「～上げる」は完成度の高い動作・行為を表すようになる。このことは、以下の図2のように示すことができる (A は動作の開始段階を、B は動作の完成段階を表す)。

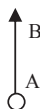


図2 「動作の完成・完了」を表す意味

以上をまとめると、複合動詞「～上げる」の意味派生関係は以下の図3のように示すことができる (矢印は意味派生の方向を表す)。

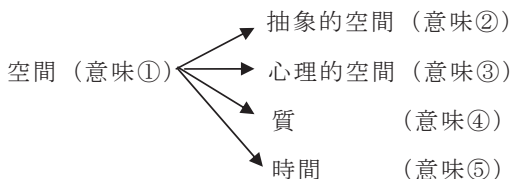


図3 日本語複合動詞「～上げる」の意味派生関係

上で述べたように、複合動詞「～上げる」の意味は意味①から意味⑤まで、もともとの動詞の意味が次第に薄れて、文法化の現象がはっきり現れてくる。それぞれの文法化のプロセスを次のように表1に示すことができる。

表1 日本語複合動詞「～上げる」の文法化プロセス

意味分類	派生関係	文法化の過程	文法化の機能
上への空間的移動(意味①)	基本義	/	/
上への抽象的移動 (意味②)	抽象的空間への派生	「空間移動」の抽象化	動詞の意味が残っている
社会的上下関係 (意味③)	心理的移動への派生	「敬意」の抽出化	動詞の意味が薄れ、表現的機能が注目される
程度の強調(意味④)	質への派生	意味の希薄化	修飾的成分(副詞など)
完成・完了(意味⑤)	時間への派生	意味の希薄化	アスペクト(終了)

6. 中国語複合動詞“～上”の分類、意味的特徴及び文法化のプロセス

6.1 中国語複合動詞“～上”の分類及び意味的特徴

本論の中国語“～上”の分類は主に先行研究『現代中国語文法総覧』³に拠る。①上への空間的移動を表す。ex. 抱上、抬上、扶上、运上、拉上

中国語の移動動詞“跑(走る)”、“跳(跳ねる)”、“爬(這う)”、“飞(飛ぶ)”、“浮(浮かぶ)”(日本語の「～上がる」の前項動詞に対応している)、及び客体の位置を変化させる移動動詞“搬(運ぶ)”、“抬(担ぐ)”、“抱(抱く)”(日本語の「～上げる」の前項動詞と対応している)などの動詞と結合して、主体や対象物の低いところから高いところへの移動を表す。これは“～上”の基本義と考えられる。日本語の複合動詞「～上げる・上がる」と同じように、前項動詞の動作によって主体或いは対象物が上へ移動する⁴ことを表し、具体的空間的移動と抽象的移動の両方とも見られる。

(21) 它是被火焰龙卷风吸上去, 因为滴溜乱转了一阵, 所以圆得象团子一样了。火焰の大竜巻に吸いあげられて、きりきり舞いしたから团子のように丸まったらしい。(日中対訳『黒い雨』)

(22) 中国教育也要跟上经济发展的步伐。(CCL)

中国の教育も経済発展のスピードを追い上げなければならない。(筆者訳)

②動作の結果を表す。ex. 考上、当上、过上、买上、吃上

このグループは、前項動詞が主に“吃(食べる)”、“买(買う)”、“还(返す)”、“考(受験する)”、“当(〈職業や身分を表す名詞〉になる)”であり、それと結びついて、「初期の希望や目的を達成した」という意味を表すが、「なかなか達成しにくい」、「一生懸命がんばったからこそその好ましい結果」というニュアンスを含んでいる。前項動詞の動作によって主体に望ましい結果が生じることが注目されている。前項動詞には意志性の強いものが多い。

(23) 考上大学。(CCL)

大学に合格する。

(24) 当上演员。(CCL)

俳優になった。

(25) 为了你，为了咱们今后能过上好日子，我什么也不管了！（中日対訳《金光大道》）

あんたのため、おれたちが、これから幸せになるためなら、ほかのことはどうでもいい！

このタイプは動作の累積した結果とみなしてもいいと思われる。“考上”、“当上”の後項動詞“上”は前項動詞の動作を行った主体の変化後の結果を含む、動作が完成した後の好ましい結果が読み取れる。意味①から生じる拡張義と考えられる。前項動詞の動作によって、良い結果が出てくることを表す。対象物がある基準点に達した時の結果として捉えられる。例えば、“考上”の場合、受験する（“考”）という動作によってある点数（レベル）に達したら、「合格した」（“考上”）になる（つまり、受験する（“考”）という動作だけでは「合格」（“考上”）したかどうかわからない）。動作と結果の間に因果関係があると考えられる。

③密着、付着している状態を表す。ex. 缝上、关上、闭上、穿上、戴上

(26) 戴上眼镜。(『現代中国語文法総覧』)

メガネをかけている。

(27) 穿上衬衣。(『現代中国語文法総覧』)

ワイシャツを着ている。

(28) 关上门。(『現代中国語文法総覧』)

ドアが閉まっている。

このタイプは意味②と違って、動作を行った結果、対象があるものに付着・密着した状態を表す。「過程」から「状態」への変化である。つまり、「メガネをかける」（「戴眼鏡」）という動作の終了に伴って、その結果「メガネをかけている」という状態が生まれ、「ドアを閉める」（「关门」）という動作をした結果として「ドアが閉まっている」という状態が生まれるということである。もともと動作の過程を指していた語が、動作が完了した後の状態を指すようになったものと考えられる。これは意味①から派生した用法である。前項動詞の動作によって対象物の移動した後の状態（ある物に付着・密着した）になるものと捉えられる。動作の完成と同時に対象物の状態も変化しているため、動作と結果の間に因果関係が存在していると思われる。これはアスペクトの働きをしていると考えられよう。また、このタイプは前項動詞が動作主の意志的・瞬間的動作を表す場合が多いことが観察される。

④動作や状態の開始を表す。ex. 好上、喜欢上、爱上、看上、骂上

(29) 看上书了。(『現代中国語文法総覧』)

本を読み出した。

(30) 这之后大约半年，随随和碧莲好上了。(中日対訳《插队的故事》)

それからおよそ半年後、随随は碧蓮といい仲になった。

(31) 据说玲子爱上了这个青年。(中日対訳《红高粱》)

玲子はその若者が好きになったらしい。

このタイプは、新たな事態の発生として認識され、動作が起こるイメージを“上”で表す。前項動詞に「開始」のアスペクトの意味を添加すると考えられ、よくテンス・アスペクトの標識“了”と結びついて、「無から有」、「静態から動態」への状態変化といった概念を用いて説明できる。着目点は動作の時間軸における段階にあって、動作そのものより、動作の時間軸における段階をより重視している。例えば、「喜欢上」（「好きになった」）の場合、好きになっていない状態から好きになった状態への変化を表し、意味①から拡張したものである。このタイプは前項動詞にアスペクト付与の働きをして、時間軸において開始の段階に位置している。このタイプは、意味③や日本語複合動詞「～始める」と違って、複合動詞全体は意志性を持っていない場合が多いことが観察される。

⑤軽く行う語気を表す。ex. 跑上（几圈）、玩上（几天）、喝上（几盅）

(32) 停了工，歇了活，痛痛快快地玩上几天。

仕事をやめ、骨休みをして数日を思い切り楽しむことにした。(中日対訳《金光大道》)

- (33) 他买上一股截烤白薯，一边就着冷风吃一边吃...

焼き芋を一本買い、寒風の吹き散らす中をかじりながら歩き... (日中対訳《活动変人形》)

- (34) 父亲每天下了班回来总得喝上三两白干。

父親は仕事から帰るときまって強い焼酎を飲む。(中日対訳《钟鼓楼》)

このタイプは“上”という動詞が実質的な意味を持っておらず、“上”がなく単独の前項動詞だけでも文全体の意味が変わらない。例えば、“买上”と“买”は意味が全く同じで、ただ“上”を付けることによって、ユーモラス、諧謔のニュアンスを添加する働きを持つようになる。この場合、“上”は常に軽音の傾向を帯びる。また、対象の前に普通は数量を表す成分(例えば、“几天”、“一股”、“几盅”など)が来る。

6.2 中国語複合動詞“～上”の文法化

6.1節で述べたように、中国語の複合動詞“～上”は以下のような意味を持っている。①上への空間的移動、②動作後の好ましい結果、③密着・付着の結果状態、④動作や状態の開始、⑤軽く行う語気。

意味①において、普通は前項動詞は移動動詞であり、日本語複合動詞「～上げる」と同じように、対象物が動作主の動作によってあるところから上の他のところへ実際に移動することを表す。これは中国語の“～上”の基本義と言える。図で示すと日本語複合動詞「～上げる」の意味①と同じであるため、ここでは省略する。

意味②は前項動詞の表す動作の終了後の好ましい結果、或いは目的の達成を表す。これは日本語複合動詞「～上げる」の「動作の完成・完了」の意味と似ているが、日本語の方は動作自身の完了のみに焦点を当て、結果を問うことはない。それに対して、中国語の方は動作終了後の好ましい結果が求められる。このグループにおいて、前項動詞は活動動詞であり、動作主がある目標を達成するために、一生懸命努力する必要がある。例えば、“他考上大学”(彼は大学(の入学試験)に合格した)という場合、「彼は大学の入学試験に参加し、試験をちゃんと受けて、結局合格した」という過程であるが、「試験を受ける」という過程は「合格した」の前提条件となる。前項動詞の“考”(受験する)

と“上”「合格する」の2つとも欠かせないもので、単に“他考大学”（彼は大学の入試を受ける）或いは“他上大学”「彼は大学に通う」では完全に複合動詞“考上”の意味を表せないのである。つまり、単なる前項動詞の完成では必ずしも目的を達成するとは限らない。動作の完成後の段階において、いい結果も悪い結果も生まれる可能性があるが、複合動詞“～上”は好ましい結果（好ましい質のもの）に焦点を当てると考えられる。

意味③において、前項動詞は活動動詞で、前項動詞の動作によって対象物があるものに付着・密着した状態を表す。

意味④は動作の開始の段階を表し、動作の開始の前から動作の開始への時間軸上における変化に着目していると言える。つまり、静態から動態への変化を表す。

意味⑤においては、もともとの動詞“上”の表す意味が完全に失われて、話者の軽く行う語気を添加する働きを有する。この時、複合動詞“～上”の意味は単純な前項動詞の表す意味と同じで、後項動詞の“上”がなくても意味が変わらない（例えば、“玩上几天”＝“玩几天”、“跑上几圈”＝“跑几圈”）。この場合、複合動詞“～上”の意味は完全に希薄化し、徹底的に文法化した段階であると考えられる。単純動詞の場合は、普通の語気を表すが、“上”を添加することによって、前項動詞の動作を軽く行うという話者の気持ちを表すようになる。普通の語気に比べて、話者の快い気持ちを“上”の性質を持つものとして捉えやすいので、この意味は基本義の「上への空間的移動」から発展してきたと考えられる。

以上の分析からわかるように、中国語複合動詞“～上”の拡張義は基本義の「上への空間的移動」から派生したものである。全体から見れば、中国語複合動詞“～上”の拡張義にある「動作後の（質的）結果」（意味②）と「軽く行う語気」（意味⑤）という意味は空間に関わっており、「動作後の結果状態」（意味③）と「動作や状態の開始」（意味④）は動作の時間軸における位置として捉えられて、内的時間に関わっていると言える。動作後の状態、動作の開始などは動作の開始や終了の後の変化を表し、動作後の状態は動作の終了を前提として成立するものであり、それらは動作が時間軸における位置を前提として捉えられるからである。これらのことを踏まえ、中国語複合動詞“～上”の意味派生関係を以下のように示すことができる。

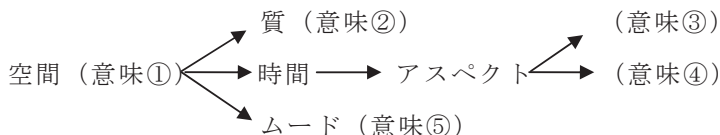


図4 中国語複合動詞“～上”の意味派生関係

また、以上で述べた中国語複合動詞“～上”の文法化過程は次の表2にまとめることができる。

表2 中国語複合動詞“～上”の文法化プロセス

意味分類	派生関係	文法化の過程	文法化の機能
上への空間的移動 (意味①)	基本義	/	/
動作の結果 (意味②)	空間から質への派生	「空間移動」の抽象化	動作の完成後の結果
付着・密着した状態 (意味③)	時間への派生	意味の希薄化	アスペクト (結果状態)
動作・状態の開始 (意味④)	時間への派生	意味の希薄化	アスペクト (開始)
軽く行う語気 (意味⑤)	主体の心情	意味の希薄化	ムード (表現的機能)

7. 日本語複合動詞「～上げる」と中国語複合動詞“～上”の共通点と相違点

日本語複合動詞「～上げる」と中国語複合動詞“～上”に関しそれぞれの意味拡張のプロセスを述べた。両者の意味拡張における共通点と相違点を以下のようにまとめることができる。

● 共通点

A、有する意味

意味において、両者とも「動作対象の上への移動」と「動作の完成・完了」の2点において共通している。

B、派生の方式

両者の各拡張義は共通する基本義「動作の上への空間的移動」から派生したという点で同じである。

C、アスペクトの機能を果たしている

拡張義において両者ともアスペクトの働きをしている用法がある。

● 相違点

A、「動作の完成・完了」を表す意味において、日本語の方は単純に動作の終了に焦点を当てて、必ずしも結果は求めない。中国語の場合は、動作終了後の結果に着目し、好ましい結果或いは対象の変化を求める。中国語の動詞には結果性を持っていないものが多く、動作が完成したといっても結果がどうなるかは明確にならないため、常にその後ろに結果性を表す成分を付けることによって結果性を明確に示すようになる。

B、拡張義において、両者ともアスペクトの働きをする例が見られるが、日本語の方は動作の完成のみを表すのに対し、中国語の方は動作の完成と開始を表す。アスペクトを表す用法に関しては、中国語複合動詞“～上”の意味範囲がより広い。

C、全体から見ると、中国語複合動詞“～上”の方が意味拡張の範囲が広く、文法化の度合いもより高いと思われる。6節の分析結果から見ると、中国語複合動詞“～上”の後項動詞には「語気」という意味を表す場合があって、これは後項動詞が完全に文法化したものであり、なくても文全体の意味は変わらない。それに対して、日本語複合動詞「～上げる」の後項は複合動詞全体の意味にとって欠かせないもので、削除したら全体の意味が変わってしまう。

D、中国語複合動詞“～上”の持っている用法は、意味⑤を除き、全て「ある動作・行為の実施によって結果としてその動作・行為が実行された」という点にまとめられるが、日本語の「～上げる」は動作とアスペクトの関係だけではなく、動作の程度（前項動詞に副詞の修飾的働きをもたらすもの）及び動作に関与する人物間の社会的上下関係まで幅広い範囲に使われる。この点から見ると、日本語複合動詞「～上げる」の意味は中国語の“～上”よりはるかに広いと言える。

E、文法化のプロセスにおいて、日本語複合動詞「～上げる」の拡張義は「空間」から「抽象的空間」への発展過程であるが、中国語複合動詞の拡張義は「空間」から「抽象的空間」・「時間」への発展過程である。後者の中で

も「動作後の状態」を表す場合には、動作の終了の段階に行かないと、状態の現れが不可能であるため、動作の内在的時間は「動作後の状態」の前提条件であると考えられる。このことから、中国語複合動詞の拡張義は、「空間」から「抽象的空間」・「時間」への発展過程であると言うことができる。

以上で述べた内容をまとめて、日本語複合動詞「～上げる」と中国語の“～上”の表す意味を図で示すと、以下のようになる。

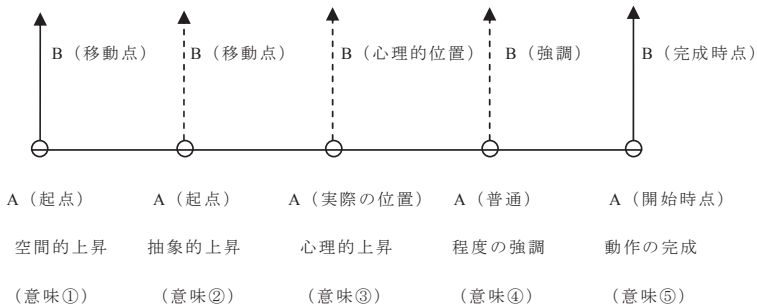


図5 日本語複合動詞「～上げる」の表す意味

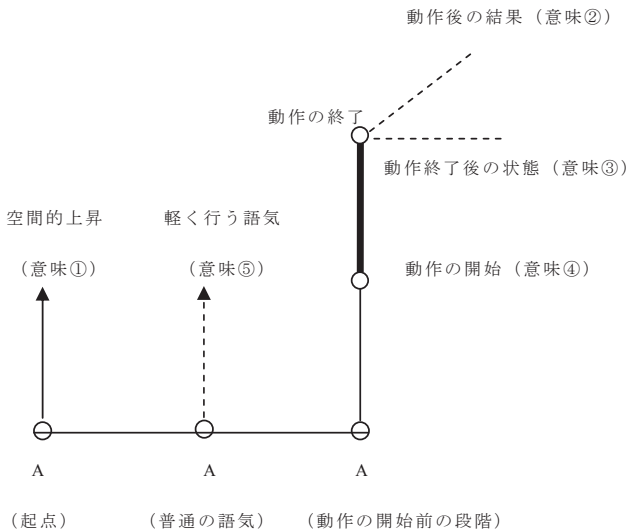


図6 中国語複合動詞“～上”の表す意味

上の図5と図6において、Aはそれぞれの起点を、細線矢印は動作を、実線は具体的意味を、点線は抽象的意味を、太線は注目されている段階を表す。

図5を見ると、全体的に、日本語複合動詞「～上げる」の意味は常に上への動作を有しており、それぞれの意味が「空間的上昇」に深く関わっていることが明らかになった。それに対して、図6の中国語複合動詞“～上”の意味には上への動作のみならず横への動作も存在し、動作の空間的と内在的時間の両方に関わっていると考えられる。また、意味の範囲から見ると、日本語の「～上げる」とも中国語の“～上”とも「空間的上昇」の意味を持っている。それと並列の位置に並んでいる「抽象的上昇」と「強調」の意味は日本語「～上げる」しか持っていない。「変化を表す」の意味は中国語の方のみ持っており、「動作の終了」は両者とも持っている（実は中国語複合動詞“～上”には「動作の終了」という意味を含んでいる）。動作終了後の延長線として「動作後の好ましい結果」と「動作後の結果状態」は中国語“～上”だけの意味範囲に属していることがわかった。

8. まとめと今後の課題

本論は上昇を表す日本語複合動詞「～上げる」と中国語複合動詞“～上”を取り上げて考察した。上への方向性を表す日中両言語において、動作が上への移動を表す時、日本語の「～上げる」は中国語方向補語“～上”と対応すること、アスペクトの働きをする時、日本語の「～上げる」は「動作の終了」を表すが、中国語の“～上”は「状態の変化」の意味を有することがわかった。さらに日本語の「～上げる」は動作そのものの終了を表しているが、中国語の“～上”は動作の結果までも表せることが明らかになった。また、それぞれの意味派生のプロセスを文法化の過程として扱い、文法化のプロセスと意味派生上の共通点と相違点を明らかにした。日本語複合動詞「～上げる」は空間的上昇に深くつながっていて、拡張義も「空間的移動」から派生している。それに対して、中国語複合動詞“～上”は全体的に空間と動詞の内在的時間に関わっていて、意味の派生は空間と動作の時間軸における位置によって捉えられると考える。

本論は上昇を表す日中両言語の複合動詞を取り上げ考察した。これは移動事象を表すものが言語の多義派生に影響する一例であると考えられる。両言語にそれらの差異が生じる原因を明らかにするには更なる研究が必要である。

例えば、日本語にも中国語にも動作の結果性を含む動詞と含まない動詞が存在しているが、それぞれどのような特徴があるか、複合動詞全体の意味にどう関わっているか、まだはつきりしていないところがある。今後そういった原因を深く探求するため両言語に対して体系的に考察していきたい。

注

- 1 用語は、『現代中国語文法総覧』からそのまま借用する。
- 2 のグループには、「獵犬は洗い熊を追い上げたあと、しばらくは木の下にいるよ。」(BCCWJ ウィルソン・ロールズ (著) 和田穹男 (訳) 『ダンとアン』) という例も見られる。特に主体の低位置から高位置への移動を強調せず、前項動詞の動作によって主体が元の場所を離れて他の場所へ移動することを表す。中国語複合動詞“～上”にもそのような例が見られた。
- 3 『現代中国語文法総覧』には、中国語の動補構造“～上”の分類に関し、本論の分類に加えて「能力を表す」という分類も見られる。本論はこの類の動補構造を「可能補語」として別扱いしたので、本論の考察対象から除いた。
- 4 陳 (2003) によると、主体の元の場所から他の場所への移動を表し、特に低い場所から高い場所への移動を強調しない例が見られる。日本語複合動詞「追い上げる」と同じように“他追上了汽车 (CCL)”「彼はバスを追い上げた (筆者訳)」という例が挙げられている。

参考文献

- 秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 金水敏 (2004) 「日本語の敬語の歴史と文法化」『月刊言語』33 (4), 大修館書店
- 黄利恵子 (2002) 「現代中国語における“V + 上 + L”構文：“上”の終結性をめぐって」『多元文化』2, pp.107 - 117
- 左咏梅 (2008) 「「上」と「下」のイメージ・スキーマに関する考察」《理論言語学研究》2, pp.268 - 276
- 陳月吾・王育潔 (2011) 「複合動詞後項文法化の日中比較—「V - 上げる」と「V - 上」を中心に—」『福井工業大学研究紀要』41, pp.548 - 553
- 陳光明 (2003) 《現代漢語動相標誌的研究》博士論文 国立清華大学語言研究所 pp.88 - 96
- 日野資成 (2001) 『形式語の研究—文法化の理論と応用—』九州大学出版会
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房 pp.35 - 54
- 北京語言學院語言教學研究所 (1992) 《現代漢語補語研究資料》北京語言學院出版

- 松本曜（2003）『認知意味論』大修館書店
- 待場裕子（1992）「日中の複合動詞の対照研究（三）—中国語の「動詞・形容詞+派生義を表す方向補語構造の場合（上）」『流通科学大学論集—人文・自然編』4, pp.47 - 60
- 待場裕子（1993）「日中の複合動詞の対照研究（四）—中国語の「動詞・形容詞+派生義を表す方向補語構造の場合（下）」『流通科学大学論集—人文・自然編』5, pp.45 - 69
- 宮下博幸（2004）「文法化研究とは何か—言語変化の謎を解く」『月刊言語』33
- 守屋広則（1995）『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東方書店
- 劉月華等（1996）『現代中国語文法総覧』くろしお出版
- Traugott, E.C. and R.B. Dasher（2002）Regularity in Semantic Change, Cambridge University press.